

古典インドにおける文体論

——ダンディン著『美文体の鏡』を中心に——

和田 悠 元

古典インドにおいても、文体というものに関する見方や評価は一定ではなかった。それが地域によっても色々異なっていたことは、例えば文豪 Bāṇa の HC. 冒頭の「北方 (udīcyā) では掛詞 (śleṣa) が優位を占め (prāya), 西方 (praticyā) では意味だけ (artha-mātraka) が、南方 (dākṣiṇātya) では連想 (utprekṣā) が、ガウダ国 (gauḍa, 東方) では字音の派手さ (akṣara-ḍambara) が [優位を占める].」(HC. intro v.7) という一文によっても推察される。Bāṇa に先行すると推定される作家・詩論家の Daṇḍin (= D.) はその主著 KĀ. において様々な文体観のあったことを示唆しつつも、明確な特徴を有するもの (prasphuṭa-antara) として、ガウダ体 (gauḍi = G.) とヴィダルバ体 (vaidarbhi = V.) の二文体を示した (KĀ. 1.40)。彼は通常「文体」を意味する “rīti” という言葉は使用せず、代わりに「道」を意味する “mārga”, “paddhati” あるいは “vartman” という言葉を用いたが、現存資料による限り、文体に十種の guṇa (詩的美質) を連関させて論じた最初の人物として著名である。本稿はこの D. の提示する guṇa と両文体の関連性を具に検討していくことにより、初期古典修辞学における文体論の様相を明らかにすることを目的としている。D. は KĀ. 1.41 において十種の guṇa, 即ち① śleṣa (纏まり), ② prasāda (明瞭さ), ③ samatā (均一性), ④ mādhyura (甘美), ⑤ sukumāratā (優美性), ⑥ artha-vyakti (意味の明晰), ⑦ udāratva (卓越性), ⑧ ojas (雄勁), ⑨ kānti (愛好), ⑩ samādhi (転用) を列挙し、続く 1.42 においてこれらが「V. の命」(vaidarbha-mārgasya prāṇa) であると述べる。D. によれば V. はこれらの guṇa を具備し、G. は多くの場合 (prāyaḥ) この反対 (viparyaya) であるとされるが、それは数種の guṇa は両文体に共通して見られるということを意味するものである。そこで KĀ. の記述を辿ってゆくと、下掲の表のように、④ mādhyura, ⑥ artha-vyakti, ⑦ udāratva, ⑧ ojas, ⑩ samādhi は両文体において見られる guṇa であることがわかる。

(246)

古典インドにおける文体論（和田）

	Vaidarbhī	Gauḍī
① śleṣa (纏まり)	○	śaitilya (弛緩)
② prasāda (明瞭さ)	○	vyutpanna (派生したもの)
③ samatā (均一性)	○	viṣama (不均一)
④ mādhyura (甘美)	○	○
⑤ sukumāratā (優美性)	○	niṣṭhura (癡)
⑥ artha-vyakti (意味の明晰)	○	○
⑦ udāratva (卓越性)	○	○
⑧ ojas (雄勁)	○*	○
⑨ kānti (愛好)	○	atyukti (誇張)
⑩ samādhi (転用)	○	○

*ヴィダルバ体は散文においてのみ認める。

従って、これらを除く五種の guṇa を検討し、その特質の異同を明らかにすれば、それは即ち両文体間の差異を浮き彫りにすることになるであろう。

まず① śleṣa とは弛緩 (śaitilya) を伴わないことである。弛緩とは発音に際して柔らかな氣息 (alpa-prāṇa) を伴う音節、即ち短母音、無気音、鼻音、半母音をもつ音節からなることを特徴とする。この弛緩を避けるために、帯気音 (mahā-prāṇa) や結合子音を用いることによって、śleṣa という guṇa が醸成される。D. が示す “mālatīdāma laṅghitaṃ bhramarair” (KĀ.1.44) という例は、m- と l- という alpa-prāṇa が存在するけれども、gh- や bh- という mahā-prāṇa の使用によって弛緩を回避していると考えられる。しかし D. が示したすべての音節が alpa-prāṇa である “mālatīmālā lolālikalilā” (KĀ.1.43) という例のように、弛緩文体は結合を重視 (badha-gaurava) するため、頭韻 (anuprāsa) の効果を生み、晦渋な表現を好む G. とよく合致する。

次に② prasāda とはよく知られた意味 (prasiddha-artha) を理解しやすい (pratīti-subhaga) 言葉で伝える guṇa である。D. は “indor indīvara-dyuti lakṣma lakṣmīm tanoti” (KĀ.1.43, 「青蓮華の光輝のような月のしるしは美しさを増す」) という例を挙げる。この例では、indu (月), indīvara (青蓮華), lakṣmī (美しさ), lakṣman (しるし) という語はいずれもその意味が容易に理解される語である。しかし G. においては “anatyarjuna-abjanma-sadrkṣa-aṅko balakṣaguḥ” (KĀ.1.46, 「あまり白くない水に生ずるもののような染みを有する白光をもつものがある」) というような、一見して理解しがたく、婉曲的な表現を取るものも認められる。“arjuna” は一般には Pāṇḍava 五兄弟の一人を指すと考えられ、この例文における「白」という意味は一般的で

はない。また “abjanman” (水に生ずるもの = 蓮華) や “balakṣagu” (白光をもつもの = 月), “anatyarjuna” (あまり白くない = anati dhavala) などの表現は、婉曲的な言い回しである。このように G. においては一般的には認められていない (nātirūḍha) 表現であっても、派生したもの (vyutpanna) として容認されるのである。

③ *samatā* とは音節の構成に均衡が保たれていることである。もしある詩節が柔らかな音節で始まったならば、詩節の終わりもそれと等しくなければならない。この *guṇa* は (1) 柔らかなもの (*mṛdu*) (2) 堅いもの (*sphuṭa*) (3) 中間のもの (*madhyama*) の三種に分類される。それぞれに対応する例は (1) “*kokilālāpavācālo mām eti malayānilaḥ*” (2) “*ucchalacchīkarācchācchanirjharāmbhaḥ kaṇokṣitaḥ*” (3) “*candanapraṇayodgandhir mando malayamārutaḥ*” (KĀ.1.48-49) である。しかし G. においては音節構成よりも意味と修辞法の華美さ (*artha-alamkāra-ḍambara*) に重点が置かれるため以下のようなになる。“*spardhate ruddhamaddhairyo vararāmāmukhānilaiḥ*” (KĀ.1.49) このような文は *viṣama* (不均一) と呼ばれ、V. では容認されない。

⑤ *sukumāratā* とは「粗くない音節を主とするもの」(*aniṣṭhura-akṣara-prāya*) であると定義される。全音節が柔らかい、即ち *alpa-prāṇa* である場合、構成の弛緩という前述①の問題に抵触してしまうため、「主とするもの」(*prāya*) と言われる。“*maṇḍalikṛtya barhāṇi kaṇṭhair madhuraḡitibhiḥ, kalāpinaḥ pranṛtyanti kāle jīmūtamālini*” (KĀ.1.70) という詩例は、若干の粗い音節を含みながらも、全体としては柔らかな音節を主としている。つまり若干の粗い音節 (*mahā-prāṇa*) の音節を含んだ組み合わせが *sukumāratā* であり、*śleṣa* の反対に位置する *guṇa* といえる。それに対して G. では以下のように、*mahā-prāṇa* が多く、発音しにくい (*kṛcchra-udya*) ものもであっても、壮麗さ (*dīpta*) や文章における迫力を重視するので、これを麤 (*niṣṭhura*) と呼んで容認する。“*nyakṣeṇa pakṣaḥ kṣapitaḥ kṣatriyāṇām kṣaṇā*” (KĀ.1.72)

⑨ *kānti* とは世俗的に通用する意味を逸脱せず、すべての人に愛好されるという *guṇa* であり、即ち奇抜なものを排除するということである。この *guṇa* は (1) 生活上の用語 (*vārttā-abhidhāna*) と (2) 物語 (*varṇanā*) において見られるという。これに対して G. は誇張 (*atyukti*) という一般常識を越え、過度に誇張された意味を好む。(1) “*devādhiṣṇyam ivārādhyam adyaprabhṛti no grham, yuṣmatpādarajaḥpātad-hautaniḥśeṣakilbiṣam*” (KĀ.1.90, 「あなたの脚の塵が落ちることによって全ての罪の洗い落とされた我々の家は、今後神々の神殿のように崇められるべきである」) (2) “*alpam nimitam ākāśam anālovyāiva vedhasā, idam evaṃ vidhiṃ bhāvi bhavatyāḥ stanajrmbhaṇam*” (KĀ.1.91, 「あなたの胸の成熟がこのようになると、実に考慮されずに、造物主によって虚

空が小さく作られた」) これらはいずれも非常に誇張的な表現であることは明瞭である。

上述のように、これら五種の *guṇa* に対する V. と G. の態度は対蹠的である。V. がこれらを是認する一方、G. はこれらとは逆の詩的表現を好む傾向がある。また、① *śleṣa* と⑤ *sukumāratā* は *alpa-prāṇa* および *mahā-prāṇa* の配合に基づいて、関連性のある *guṇa* であることが認められる。即ち *śleṣa* と *sukumāratā* は、それぞれ構成において *mahā-prāṇa* と *alpa-prāṇa* を主としているが、それが行き過ぎれば *niṣṭhura* および *śaitilya* となるのであり、これらは前述のように、*śleṣa* と *sukumāratā* の反対として G. の認めるところのものである。

また、② *prasāda* および⑨ *kānti* は意味の上で穏健な用法を志向する *guṇa* であるが、しばしば晦渋な文章を好む G. においては、*vyutpanna*, *atyukti* という反対の性質が好まれると考えられる。これらを総合的に勘案するに、V. は平明でバランス感覚に富むある種の典雅さを醸成する古典的美文体であるのに対して、G. はむしろこれらの弛緩、誇張、(音節の) 粗さなどを顧慮することよりも、同音反復や晦渋な表現によってもたらされる雄大で迫力ある表現を志向しているといえる。

KĀ. において D. が全ての *guṇa* を具備する V. を優れた美文体の典型と見なし、G. をしばしばその反対として低く評価していたことは明白である。しかしこの低評価の文体を自ら詩論書を著すにあたって「明確な特徴をもつもの」として敢えて収録したのは、彼以前に V. と別の独自の文体として G. が厳然と存在し、それを顧慮せざるを得なかったということに他ならないであろう。

〈略号・参考文献〉

※字数の関係上、掲載は最低限にとどめた。また註記も割愛した。

KĀ: *Kāvyādarśa* (Böhtlingk ed.); HC: *Harṣacarita* (KSS.282); P.C.Lahiri [1937/1974r]: *Some Concepts of Riti and Guṇa in Sanskrit Poetics* (New Delhi); D.K.Gupta [1970]: *A Critical Study of Daṇḍin and His Works* (Delhi).

〈キーワード〉 *Kāvyādarśa*, Daṇḍin, 文体

(駒澤大学大学院)